

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2019年 第23週（6月3日～6月9日）

今週のコメント

～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病、警報レベル超える」

第23週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は4,098例であり、前週比14.3%増であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、伝染性紅斑の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ7.09、6.34、3.32、1.33、0.86である。

手足口病は前週比50%増の1,397例で、南河内17.38、泉州10.20、大阪市北部9.31、大阪市南部7.06、堺市7.05であった。府内全ブロックで増加しており大阪市南部、北河内、大阪市西部が新たに警報レベル開始基準値5を超える。コクサッキーウイルスA6が優位に検出された。

感染性胃腸炎は7%減の1,249例で、南河内9.88、豊能8.68、大阪市北部8.23、北河内6.82、大阪市南部6.56である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の653例で、南河内5.94、中河内5.10、大阪市南部4.61、堺市4.53であった。

ヘルパンギーナは87%増の262例で、大阪市北部3.00、泉州2.45、堺市1.90である。

伝染性紅斑は32%増の170例で、北河内1.37、泉州1.30、堺市1.05であった。

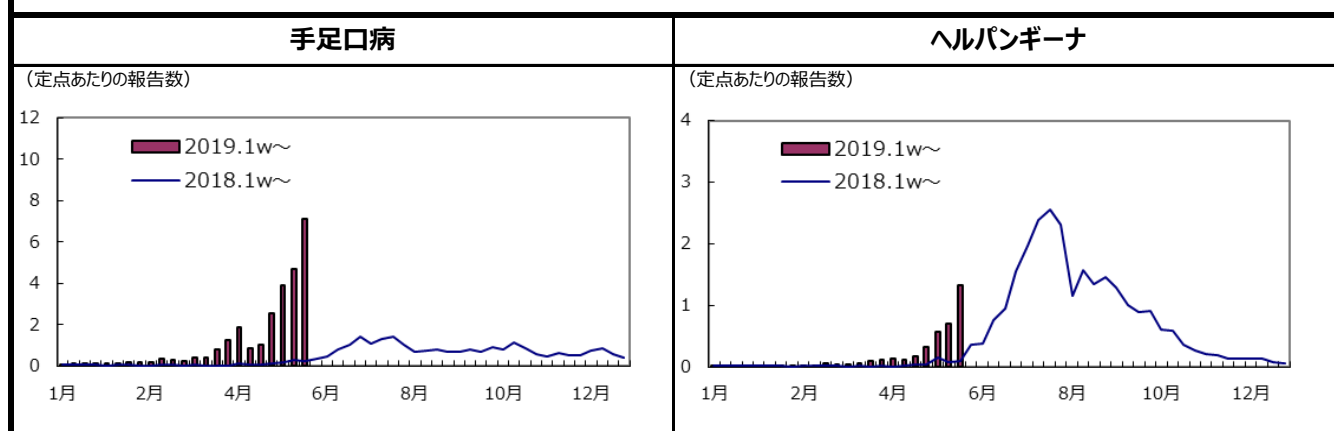


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2019年 第23週6月3日～6月9日）

第23週の順位	第22週の順位	感染症	2019年 第23週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第23週の 定点あたり 報告数	2019年第23週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	2	手足口病	7.09	50%増	0.22	1歳_43%
2	1	感染性胃腸炎	6.34	7%減	7.72	1歳_16%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.32	2%減	3.23	4歳_15%
4	4	ヘルパンギーナ	1.33	87%増	0.10	1歳_38%
5	5	伝染性紅斑	0.86	32%増	0.14	4歳_18%

第23週のコメント

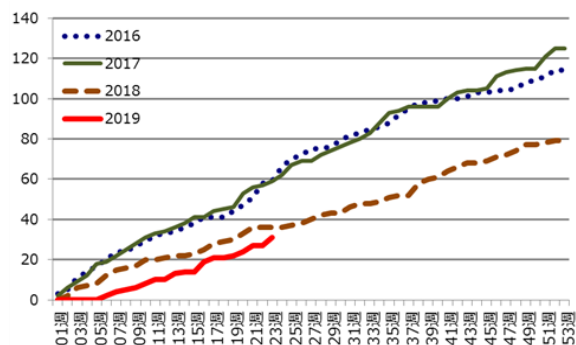
～アメーバ赤痢～ 発展途上国に渡航される方は、生水、氷に注意し、野菜、肉類を生で喫食しないようにしましょう

全数把握感染症

アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は、原虫である赤痢アメーバ (*Entamoeba histolytica*) を病原体とする感染症である。世界で、約5億人が感染し、毎年約4-7万人が死亡している。発展途上国への渡航者によくみられる感染症だが、国内では男性同性愛者間での感染が多い。感染経路として、汚染された飲食物による経口感染や性的接触による感染がある。大腸粘膜面に潰瘍性病変を形成し、粘血便を主体とする赤痢アメーバ性大腸炎を発症させる。大腸炎症例のうち5%ほどが腸管外病変を形成し、大部分は肝膿瘍である。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[アメーバ赤痢とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数 (2019年 第23週6月3日～6月9日)

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

疾患名	報告数	府内								府内累積報告数
		豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	3	1						2	44
4類感染症	A型肝炎	1					1			11
	レジオネラ症(肺炎型)	3	1				1		1	29
5類感染症	アメーバ赤痢	4			1	1			2	31
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3		1				1	1	71
	急性脳炎	1						1		12
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1			1					23
	後天性免疫不全症候群	1							1	55
	侵襲性肺炎球菌感染症	4		1	2			1		155
	梅毒	12			1	1		1	9	471
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	1							12
百日咳	6			1	1	1	1	2	414	
結核 (2019年4月分)	結核 新登録患者数：134名								(内 肺・喀痰塗抹陽性 51名)	
									(府内累積報告数 555名、内 肺・喀痰塗抹陽性 216名)	

(2019年6月11日 集計分)